

「ティーカップのなかの庭園…」

—プルーストにおける日本的側面—*

アンドレアス テーレ**
村松 研二郎 (訳)***

«Jardins dans une tasse de thé ...»
-Facettes japonaises de l'œuvre de Proust-

Andreas THELE
Kenjiro MURAMATSU(traducteur)

Marcel Proust's "In Search of Lost Time" is acknowledged as one of the masterpieces of French literature, but even to the Japanese reader the various allusions to Japan are rarely known. This paper wants to point out the importance of Japanese and East-Asian influences on Proust's work, but also upon his life and thought. In his case these Japanese aspects seem to go much deeper than the superficial fashion of Japanism which influenced in the beginning of the 20th century not only numerous European aesthetes and writers, but also painters and composers. And reconsidered in this context, Proust's work has to be appreciated as an important contribution to comparative thought and global philosophy.

キーワード

プルースト、仏文学、ジャポニズム、美学、比較思想

1. パリ万国博覧会とジャポニズムの影響

今日、プルーストの作品が日本と結びつけて考えられることはあまりない¹。もし、彼の一連の小説の最初の部分を成す「スワン家の方へ」の第1章「コンブレ」 - 1913年に発表されている - が「ティーカップのなかの庭園」とでも題されていたなら、ちがっていたかもしれない。おそらくそれはもっと容易なことになったであろう。しかし、「コンブレ」という想像上の小さな町の名前とこの章の主役の名前「スワン」をもってプルーストはフランス第三共和国のある一時代を想起させる

*この記事は、論文 Thele, A. 2004, «Jardins dans une tasse de thé ...». Facettes japonaises de l'œuvre de Proust, *Le Japon et l'Europe Tissage interculturel*, E.M.E. の全訳である。掲載紙は、同題のシンポジウムの記録で、編集者は、ベルギーのルーヴァン・カトリック大学ロマンス語学部の教授 Jean René Klein と Francine Thyryon である。

** リエージュ大学教授

***名古屋大学文学研究科博士後期課程及びリエージュ大学社会学博士課程在籍中

「ティーカップのなかの庭園…」

のを好んだ。または、読者は「ふかふかの冷たい枕」か、もしくはティーカップに浸された「マドレーヌ」の味、といった主人公の少年時代の思い出をせいぜい思い起こすのみである。

プルーストの同時代を生きた者らにとってはしかし、彼の作品の日本的側面に気づくことはより容易なことであっただろう。1919年にプルーストがゴンクール賞を受賞した作品『花咲く乙女たちのかげに』の発表後、世間は「この日本的タイトル」に対して熱狂し、ロベール・ド・モンテスキウは「歌麿や広重の作に似たこの題名の背後に、何と豊かな読解の可能性があることだろう」²と書いている。

プルーストが『失われた時を求めて』に取りかかった時、芸術運動としてのジャポニズムは西洋において数10年来の流行となっていた³。19世紀の日本開国と、1867年、1878年、1889年、1900年のパリ万国博覧会時に日本の示した大変な存在感によって、パリの上流社会の内に東アジアの品物と骨董品があふれることになった。中国の竜、盆栽、家具そして浮世絵は、上流社会の愛好家と収集家にすぐに目をつけられ、着物を着ることは女性にとって必須の事柄となった。こうした背景の下、過去についての美学的探求は東アジアの文化的宇宙への誘いの様相を帯び、そのエキゾチズムはプルーストの美学的観念を指し示す象徴的な要素となってゆくのである。

しかし、我々の目にするのは、日本の美学的観念に対するほめかしばかりではない。『失われた時を求めて』においては、当時の政治情勢も存在しており、プルーストの思想において占めていた日本の影響を大きく反映している。彼によれば、「この日本は驚異的」⁴である。

小論ではまず、プルーストの作品に見出される美学的観念から検討を始め、彼の日本や中国に関する引用が単に小説の登場人物のエキゾチックな装飾のために行われているのではないことを示す。そして、その観念形成を当時のジャポニズムと中国文化の流行のコンテクストのなかに位置づけてから、当時の歴史的・政治的影響に関するいくつかの例を挙げる。

II. 花咲く庭園の魅力

『失われた時を求めて』における重要なエピソードの1つは、マドレーヌに関する有名なエピソードであるが、そこでは、主人公の思索において過去という概念が出現する。このエピソードは「探求」の初めに語られ、最後に再び現れる。既にここで日本との関係は偏在している。

「そして、おばが私に淹れてくれたチヨルのハーブティーの中に浸したマドレーヌのかげらの味に気づいてすぐに（私はまだなぜこの思い出が自分を幸せな気分にしてくれたのかを知らず、それに気づくはずと後のことになるとはいえ）、おばの部屋のあった道に面した灰色の古い家が、おばの家の後にあった両親の庭付きの小邸宅（家についてのわたしの思い出の景色はここで切れるが）にとっての舞台装飾のように思いだされた。；そして、おばの家とともに、町も、皆が私を昼食前に追いやっていた広場も、朝から晩まで、いつ何時、わたしがお使いにいかされていた通りも、天気が良いときに通った道も。

そして、日本には、水を充たした磁器のお椀のなかに、小さな紙片をいれて水に浸し、それがひろがり、形があらわれ、色があらわれ、分化して、はっきりとわかる花や、家、人物になってゆく

のを楽しむ遊びがあるというが、それと同じように、私の家の庭やスワン氏の庭園のあらゆる花々、ヴィヴオンヌ川の睡蓮、ひとのいい村人、そのなつかしい家々、教会、コンブレの町の全てとその郊外、こうしたすべてが、はっきりとした形をとって、町も庭も、私のティーカップから外に現れ出たのである」⁵

また、この節は1913年11月13日のル・タン *Le temps* 紙のインタビュー記事においてプルースト自身によって言及されており、*Contre Saint Beuve* においても類似の節が見られる⁶。彼が「スワン家の方へ」の第一部を「ティーカップのなかの庭園」と一時名付けようと考えた⁷ことから、プルーストがいかにこの節に重きをおいていたかがわかる。

プルーストにとって、日本庭園とは内面的で想像的な旅を想起させるものであり、このテーマは後にも取り上げられる。それは、主人公が次のように語るときである。「日本の盆栽の小人のような木が、それでもしっかり杉、檜、マンチニールの木であることがそれでも良く感じ取れるように、想像力は調和 *proportions* を取り戻す」⁸

こうしてプルーストは、借景という日本庭園の視覚世界を「調和」という概念で理解するに至る。「我々の目は、人工的な庭園から自然のままのムードンとヴァレリアン山の丘まで境なく移り、どこに境界線を引けば良いのか分からず、自然の風景を庭園中に入れ込ませ、しかもその彼方に庭園の人工的魅力を投影している」⁹

しかし、日本庭園へのこのような言及は、現実の木々や植物、花といった物質的存在にもある。主人公にとって、このような庭園は、「一つのより美しい花を得るために他の花を犠牲にする日本人庭師たち」¹⁰にとっても同様、美という実在の顕現そのものだった。

花々の想起が大変多いが、特に多いのが、フランスに1862年より導入され¹¹、ピエール・ロチの『お菊さん』の発刊年である1887年以来、洗練と女性の美に結びつけられた日本の菊である。社交界におけるジャポニズム愛好家の接待においては、皆「テーブルを日本の菊だけで飾る」¹²ことに誇りをもち、後にスワン女史となるオデット・ド・クレシーは後のゲルマンテ王女であるヴェルデュラン女史の批判を受けなければならなくなる。「あなたは菊を生けることもできないのね、とスワン女史がちょうど見送りに立ち上がろうとしていたところに、彼女は立ち去りながら言ったものだった。これは日本の花なのよ、日本人がするのと同じようにこれらは配置しなければならないでしょう」¹³、と。

しかし、庭園と花々は装飾に使われるだけではないため、『失われた時を求めて』の様々なコンテキストにおける庭や花々にたいする言及や想起は、主人公の様々な時代と観察を結びつけ織り上げる。

主人公による自然の想起は、時に神秘的な感情の雰囲気を満たされている：「そのシルエットが日本の絵画を想起させる」木々を見る時、「私の心は急に高鳴るのだった」¹⁴

しかしながら、この主人公の神秘的感情は客観的な美学的認識によって弱められ、風景描写へと続く：「その岸边には木が茂っていたから、茂みの影がいつもは川面にくらい緑の影を投げかけているのであるが、雷雨の過ぎ去って再び晴れわたった夕など、それは鮮やかな青色に、紫を含んで、七

「ティーカップのなかの庭園…」

宝焼きのように、日本的な色合いにそまるのを私はみたものだ。」¹⁵

しかし、この美学的観念は、現実をイメージや絵画として捉えるこの芸術愛好家による注意深い眼差しを通じ、自然に関する観想の中へ入り込んでいく。：「木々のシルエットは、鮮やかにその青みがかった金色の雪の上に映し出されていた。日本の絵画やラファエロの作品の背景にみられる繊細さで…」¹⁶

この自然的なものとの関係はライトモチーフとして何度も取り上げられ、必要に応じて表現、反転、転換がなされている。「スワン家の方へ」において、プルーストは「海岸に、日本の屏風のように見事なりんごの木を所有するシャトルロー公爵」¹⁷を想起する。後にこのモチーフは『花咲く乙女たちのかげに』において想起される。そこでは「海の彼方の地平線はりんごの木に対して浮世絵の背景のように現れて」¹⁸おり、最後に『見出された時』において、芸術的絵画は「銀地にノルマンディーのリンゴの木すべてが日本的様式風に浮き上がる」自然を「今日風の豪華な室内装飾」¹⁹のように表現するものだ、というように表現している。

画家のエルスチールに対する賛美も同じコンテキストでおこなわれ、主人公が「その作品は第一、第二の様式、つまり神話の様式と画家が影響を受けた日本の様式の両方が見事に反映されていた」²⁰と思いをめぐらすのである。

これらの影響の内、特に重要なのは、ミニチュア化の影響である。日本庭園における盆栽のように、エルスチールはレア嬢がもっていた流行の小さな傘に対して「なんと小さい、なんと丸い、まるで中国の傘のよう」²¹と感嘆する。

日本の絵画や浮世絵は—モネ、ゴッホをはじめとする当時の画家にみられるように—、芸術的創造にインスピレーションをあたえていたが、主人公においても、その記憶の働きを動かし、失われた時の探索にとって大変貴重な思い出を呼び起こす：「ある時、それは浮世絵の展示会であった。月のように赤く丸い太陽の繊細な輪郭の隣に、黄色い雲が現れていた…」²²かくして、日没は主人公にとって「見事な絵画の一作、高貴な日本の七宝工芸のよう」²³に現れることになる。

思い出と同様に、想像力は、事物を変化させ、事物の実に様々な形態の可能性を「何匹もの中国風の竜が絡み合った柱の写真」²⁴のように喚起させ、新しい現実を創造することを可能にするのである。

しかも、プルーストが日本的要素によって豊かにした芸術分野は、エルスチールによって代表されるような絵画の世界だけではない。交響詩「海」（1905年）を作るため、北斎の浮世絵によるインスピレーションに身を委ねていたドビュッシューにおけるように、音楽の分野においてもみられる。ヴァントゥイユと「ソナタの小さな一節」はその例となるであろう。そのことは、文学を代表するベルゴットとの関連でも同様である。

彼の死のわずか前に、ベルゴットはフェルメールの「デルフトの風景」を見にある展示会へ赴いていた。というのも、「黄色の壁の小さな面は…、大変見事に描かれていたので、それのみを眺めても、中国芸術の名品として、それのみで成立しうる程の美しさだった」²⁵からであった。

日本画か中国画に由来するように見えるエルスチールの作品についての描写は、主人公とアルベルティエヌとの間で行なわれた会話の際に、文学にもおよぶ。ドストエフスキーにおける登場人物

の行動は「海が空の中にあるように見えるエルスチールの描写と、同じような錯覚をわれわれに引き起こすようだ」²⁶と述べられている。

絵画と文字は混じりあい始めるのであるが、それは、形と意味が一体となった書道のようなものである。書道におけるこの一体感は、我々が「文字を読むこともできずに、一つの絵のように眺める」²⁷時、いっそう強まる。

主人公の語彙にさえも、ブルーストの解説者が指摘するように、日本へのほめめかしが際立って表れている。例えば、若い女性に対する「ムスメ」という言葉である。「もちろん、私がアルベルティエヌと知り合った時、彼女は『ムスメ』という言葉を知らなかった。ふつうなら、彼女はその言葉を知ることにはなかったであろう。そして、私としても、そのことに何の不都合も感じなかったに違いない。なぜならその言葉ほど鳥肌立たせるような言葉はないからだ。その言葉を聞くと、だけで、口の中に大きな氷の塊をほおぼる時感じる歯の痛みのような痛みを感じる。しかし、魅力的なアルベルティエヌにかかると、『ムスメ』という言葉でさえも私には不快でなかった」²⁸

これらの文章は、『お菊さん』の次のような一節の中でこの表現を使用しているロチに直接影響を受けていると思われる：「ムスメは若い娘かとても若い娘を意味する言葉である。それは日本語の中で最も美しい言葉の一つである。この言葉の中には、仏頂面を意味するムウ moue（若い娘がするような優しくて可笑しい、ちょっとした仏頂面）と、フリムウス frimousse（少女がするような愛嬌のあるかわいい顔）が含まれているように思える。私はこの言葉をしばしば使用するが、フランス語においてこの言葉に相当するような言葉を知らない」²⁹

III. 骨董品や、戦争に関するおしゃべり

しかし、日本美に関する連想や観念は、自然や芸術の分野においてのみ存在したのではない。この時代のジャポニズムの流行、日本や中国に対する憧れはブルーストの描写する社会にはあまねくみられ、それは、衣服、食物、道具、骨董品、あるいは政治的議論にまで及んでいた。

また、この時代において、ブルーストは、日本や中国の様々な品物に囲まれ過ぎていた - 「彼があれほど愛した」³⁰「とても美しく小さな中国の家具」³¹や「ベッドの先の後ろにある、5枚の葉と中国の装飾を施したとても美しい屏風」³² - というのは、かれの友人のなかには、ロベール・ド・モンテスキウ、ルネ・ジンプル、シャルル・エフルッシ³³といった東洋芸術の収集家や通人がいたからである。

こうして、小説の主人公達はジャポニズムに深く刻み込まれた雰囲気の中に生きていた。オデットは「中国の骨董品の置いてあるとても奇妙で小さなホテルに住んでいた」³⁴。「大きな中国の壺」³⁵と「日本の絹製のクッション」³⁶の隣に、中国の「装飾鉢」³⁷やさらに「絹の細い縄につるされた大きな日本の提灯（しかし、訪問者から最低限の西洋文明の快適設備を奪わないために、明かりはガスで点される）」³⁸

後に、これらのモチーフは、主人公が「着物」³⁹を想起する時、またはゲルマンテ公爵夫人が「霧のような中国ちりめんのドレスに包まれていた」⁴⁰というように、再び取り上げられる：「彼女の部

「ティーカップのなかの庭園…」

屋着は中国製だった」⁴¹。そうかと思うと、主人公はアルベルティーンについて「中国ちりめんの美しいガウンか日本のドレスのどちらかを着ていた」⁴²ことを確認したりする。「中華料理のディナー」⁴³のために集まる登場人物の描写そのものにもこの影響がみられる：「まるで中国のインクで描かれた墨絵の中の線影によって粗描されたように、彼女の細くて小さな顔は縮れてまとまりのない黒髪に囲まれ」⁴⁴。そして、気の利いた態度、もしくはエスプリのある態度を示すために、主人公達は、何でも日本由来であるような流行をほめかしていた：「これは日本のサラダではないの？彼女はオデットの方を向いて小声で言う」⁴⁵

この「日本のサラダ」のモチーフは、その時代に大変流行していた、1887年発表のアレクサンドル・デュマ・フィスの戯曲 *Francillon* を念頭においている。こうしてオデットは、自分の女友達の一人が「アレクサンドル・デュマ・フィスが戯曲の中で語ったもの全てを入れて、この日本のサラダを」作らせたことを話し、「彼女は何人かの女友達を食事に来よう招待していた。残念ながら、私は選ばれた者ではなかった。しかし、彼女は私達にそのことをすぐに話してくれた；どうやらそれは相当ひどいものだったらしく、私達は涙が出るほど笑ったものだった」⁴⁶

このサラダのモチーフは、『見出された時』において、主人公が美味しい料理の準備や食事について想起する際に、再び触れられている。そこでは、「単純なジャガイモのサラダが、日本の象牙のボタンのような固さ、あるいは中国人女性が釣りたての魚に水を与えるのに使う象牙の小さなスプーンのような色合いのジャガイモで作られているかのようである」⁴⁷

しかし、刻々と時が流れていく内に、このジャポニズムの流行の波は少しづつ弱まり始め、主人公は「これら全ての形だけの中国趣味と退廃した宦官の細々しさの全てが私には虚しく思えた」⁴⁸と認めている。時がたつにつれて、「18世紀風の流行を前に極東は次第に後退し」⁴⁹、内装は「ルイ15世時代風の花束で散りばめられ、もう昔のように中国の竜ではなく」⁵⁰なった。そして「今は日本の部屋着でオデットが親友を迎えるのは稀なこととなった」⁵¹。オデットは「彼女が今では少しばかり『つまらなく』、『遅れた』ものと見なしていたたくさんの中国の品物を乱雑な物置場に入れ、ルイ14世時代風の古い絹をめぐるせたたくさんの小さな家具と取替え」⁵²はじめた。ただ、いくつかの思い出の品が、この流行を偲ばせていた。それは、「今のルイ14世時代風の居間の見事な花模様の装飾と対照的な、一本の花しか入れられない長い首のクリスタル花瓶の中の本の日本のバラかアイリスだった。」⁵³主人公の祖母がもっていた「古代中国のコレクション」⁵⁴も、「レオニーおばさんからもらった古代中国の大きな壺」⁵⁵と同様に過去に消え失せていた。主人公が「父が知り合っていた中国の骨董商の店」⁵⁶で売り払っていたからである。

ジャポニズムの流行が一度過ぎ去ってしまうと、東アジアをめぐる会話は、ある階層にとっては、あてこすり、冗談、冷やかし、駄洒落のネタとなってしまった。たとえば、主人公達は、「中国の神についてかたるが、それは今日のフランスでは、バラモンよりも、キリストさえよりも、あるいは政治的な無関心者よりも、狂信的とみなされていた」⁵⁷、あるいは「中国の広東省では、腐ったあおじの卵よりも洗練されたご馳走にお目にかかれない」⁵⁸などと、語り合う。このように、中国について語ることは、この社会においてエキゾチズムやばかげたこと、軽蔑的なことの種となる：「公爵夫人はあなたに中国語の辞書（チンカンブの辞書の意味－訳注）をあげるでしょう…」「お前は

中国で一生暮らすと言って私達を脅していた」「お前はたぶん中国女に恋をしていたんだろう」⁵⁹「あなたは私をあそこにいる中国人達のところに放って行かないでしょうね」⁶⁰

プルーストはこうして社会を分析し、皮肉を込めて描写する。社交界のディナーについて言えば、「古い嗅ぎタバコ、浮世絵、珍しい花の愛好家」⁶¹、あるいは「磁器の芸術」と「日本の象牙のボタンの固さのユン・チンの皿」あるいは「チン・ホンのすばらしい皿に盛られたバルビュ（訳者注：ひらめ類の魚の名）」⁶²の前で賛美の声をあげる愛好家の集まり、といった調子である。

こうした皮肉は、政治の分野においてさらに強調される。フランソワーズのような階層の低い人々に目を向けると、彼女は「日露戦争が勃発した時」、「みじめなロシア人」に同情し、「日本について中立で居続けたフランスを犯罪的と決めつけていた」⁶³ 政治的議論の中では、皆「日露戦争の最新情報」⁶⁴に触れ、「中国に関する意見交換を行い」⁶⁵、「中国のために不安になる」⁶⁶か、あるいは「黄人禍」⁶⁷を恐れていた。こうした考えは、もちろん、黄色人種が「一時的に名誉回復した」⁶⁸ 第一次世界大戦時には変更されてゆく。

外交官のノルポワ氏のような滑稽な人物を描くために、プルーストは『花咲く乙女たちのかげに』の中で「日露戦争における日本人の敗北とロシア人の勝利の理由を、確実な証拠とともに、科学的に演繹したある大変有力な軍事批評家」⁶⁹を彼に引用させているが、このテーマは「ゲルマンテ公爵夫人の方へ」のなかで再び触れられることになる：「私は、日露戦争がロシア人の勝利と日本人の敗北に終わることを反論しようのない根拠をもって証明した彼の大変優れた研究を読んだのですよ？」⁷⁰ 歴史的コンテクストを別にすれば、これらのほめかしは「中国の大きな壺のコレクションと自らの連隊の一つとを交換した」⁷¹ というオーギュスト・ド・ポローニュに関する話とほとんど同じくらいに皮肉的に語られている。

主人公は、これらの同時代人の言行の中にあって「ロシア人が日本人を前に、戦略的移動と称して、予定された、より有利な位置へと退却してゆく時の事実上の敗北」⁷²を隠すための嘘や戦争のプロパガンダを暴露する。プルーストは、こうしてアイロニカルに時と遊び、歴史の厳密な時の流れを超えてしまう。『見出された時』にある「日本人が言うように、他人より 15 分間多く苦しむことができるものに勝利は訪れる」⁷³ という諺は、『花咲く乙女たちのかげに』の中で、括弧付きで主人公によって既に想起されていた：「(我々はまだ次のような思想を東洋から導入していなかった：『日本人が言うように、勝利は 2 人の敵同士の内、他人よりも 15 分間苦しむことができる者に訪れる』)」⁷⁴

IV. プルースト的雰囲気

小論では、プルーストが彼の小説において行っている、東アジア、特に日本に関するきわめて多数の言及の一部をふりかえることを試みた。目的は、プルーストをして親日家あるいは日本愛好家であるとか、ましてやプルーストの作品における東アジアの影響を過大評価しようというのではない。しかし、彼の作品においてほとんど知られていない側面を喚起させておくのは、特にプルーストの自筆原稿と『失われた時を求めて』の草稿の中に、中国と日本に関する、まだまだ多くの言及

「ティーカップのなかの庭園…」

があることが知られているだけに、私にとって重要だと思われたのである。

ここは、日本文学との関係でプルーストのスタイルを分析したり、彼が行動よりも観察を好むこと、あるいは、あるひとつの筋の展開、つまりある話の種があってそれが次第に開花する様子を語るような本格的なドラマの構築ではなく描写を好むことをなど分析するための場でもない。このような解釈のもつ正しさをそう追求せずとも、我々はプルーストが「ロシアや日本の演劇で、彼の地の芸術家によって演じられる場の異化 *dépaysagement* の魅力」⁷⁵つまり、「旅人に対して、一人のアジア人にとってヨーロッパの街の大通りが与えるのと同じような異国的で魅力的な喜びを与える」⁷⁶のである。

プルーストのいくつかの文章と表現は仏教へのほめかしも行っているように思われる。たとえば、幸福というものが「欲望の漸進的な減少、欲望の最終的な消滅」⁷⁷として定義される時、そして「ある宗教が不死について語りながらも、それによってそこから無というものを排除しない何かを想定している」⁷⁸時、などである。

こうして、病気や苦（主人公、スワン）、同様に老や死（ベルゴット、祖母）といった仏教の観念において重要ないくつかのテーマが定期的に物語の中に現れては、主人公に付いてはなれない。

このコンテキストにおいて、翻訳者鈴木道彦の次のような指摘を引用するのは有益であろう：「プルースト的雰囲気と私が呼びたいのは、我々が自らの内に有している人格の連続的な死と、時間の作用に従った人格の脱構成？再構成であり、それは、私が思うに、仏教的な伝統によって時間に身を任せ、従属し、果てはある点において、時間を超えていこうとする傾向のある日本人にとってはきわめて容易に理解できるものである」⁷⁹

しかしながら、プルーストにおける時間概念は、何人かのプルースト解説者が指摘しているように、アンリ・ベルグソンに強く影響されたものであることと、また、万物の相対性に関する彼の哲学的懐疑主義は、彼の文学的スタイルのように多くの追加的要素によって豊かにされており、彼が晩年において就寝時に読んだ愛読書でもあったモンテーニュの『随想録 *Essais*』に近いものであったことは指摘しておきたい。このために、プルーストは、作家としてのみならず、思想家としても評価された⁸⁰のであり、日本の「哲学事典」（平凡社）⁸¹においても彼の名が見られることは驚くに値しない。最後に、プルーストにおける多文化横断的側面に謹んで敬意を表したい。この側面に注目するなら、われわれはさらに彼の思想を深く分析できるであろう。魅惑的な「ティーカップの中の庭園」を歩みつつ。

謝辞

この日本語訳作成にあたっては、嶋田義仁教授による多大なご示唆をいただきました。筆者ならびに訳者より、この場をかりてお礼申し上げます。

注

¹ プルーストの作品における日本の様相を集めようと考えたのは、1997年から2000年にかけて発刊された「失われた時を求めて」の鈴木道彦による新訳に関してフィリップ・ボンスの書いた記事を読んだときであった。この新版は、NRF?: Nouvelle Revue Françaiseの美しい版にみるように、ヴァン・ドンゲンの水彩画により挿絵がなされている。新しい日本語訳において、引用は、この水彩画の挿絵に飾られた1947年のNRFの版からなされている。1996年12月20日付ル・モンド紙「Le Japon à la recherche de Proust (プルーストを探し求める日本)」を参照せよ。

² 原文: «quelle provision de savoureuse lecture, à l'abri de ce titre qui semble celui d'une série d'Outamaro ou d'Hiroshige» (Fraise 1997: 101)

³ 「Fraiseはフランスにおけるジャポニズムの最盛期を1880年から1920年と位置づけている (Ibid.: 5-7)。

⁴ 原文: «ce Japon est prodigieux» (Proust 1991, Vol. IV: 50) «Lettre à Marie Nordlinger de 1904 (マリー・ノルディンガーへの手紙)」より。

⁵ 原文: «Et dès que j'eus reconnu le goût du morceau de madeleine trempé dans le tilleul que me donnait ma tante (quoique je ne susse pas encore et dusse remettre à bien plus tard de découvrir pourquoi ce souvenir me rendait heureux) aussitôt la vieille maison grise sur la rue, où était sa chambre, vint comme un décor de théâtre s'appliquer au petit pavillon donnant sur le jardin, qu'on avait construit pour mes parents sur ses derrières (ce pan tronqué que seul j'avais revu jusque-là); et avec la maison, la ville, la Place où on m'envoyait avant déjeuner, les rues où j'allais faire des courses depuis le matin jusqu'au soir et par tous les temps, les chemins qu'on prenait si le temps était beau.

Et comme dans ce jeu où les Japonais s'amuse à tremper dans un bol de porcelaine rempli d'eau de petits morceaux de papier jusque-là indistincts qui, à peine y sont-ils plongés s'étirent, se contournent, se colorent, se différencient, deviennent des fleurs, des maisons, des personnages consistants et reconnaissables, de même maintenant toutes les fleurs de notre jardin et celles du parc de M. Swann, et les nymphéas de la Vivonne, et les bonnes gens du village et leurs petits logis et l'église et tout Combray et ses environs, tout cela qui prend forme et solidité, est sorti, ville et jardins, de ma tasse de thé.» (Proust 1947, I: 39)

⁶ *Choix de lettres*におけるElie-Joseph Boisとのインタビュー (Proust 1965?: 283-289)。 *Contre Saint-Beuve*の中の一節は「著者による序文」の中にある: 「しかし、私がビスケットを食べるとすぐに、一つの庭園全体が、それまでぼんやりとして色のくすんでいたものが、忘れられた並木道と、花かご一つ一つと、全ての花々とともに、小さなティーカップの中に、水の中ではじめて命を吹き返すこの日本の花々のように、自ら現われ出るのだった」 (Proust 1954: 54)

⁷ 1913年7月に友人ルイ・ド・ロベールに宛てられた手紙の中で、プルーストは「題名として、ティーカップの中の庭園、というのはあなたは好みますか…」と提案している (Proust 1991, vol. XII: 232)

⁸ 原文: «l'imagination rétablit les proportions, comme pour ces petits arbres japonais nains qu'on sent très bien être tout de même des cèdres, des chênes, des mancenilliers]» (Proust 1947, III, 92)

⁹ 原文: «nos yeux passent sans transition du parc cultivé aux hauteurs naturelles de Meudon et du mont Valérien ne savent où mettre une frontière, et font entrer la vraie campagne dans l'œuvre du jardinage dont ils projettent bien au-delà d'elle-même l'agrément artificiel» (Ibid., II, 266) 日本庭園における概念「借景」については、Henning (1980)を参照せよ (Henning 1980: 160-164)。 *Dictionnaire de la civilisation japonaise* (「日本文明事典」、1994年)の中での「Jardins」の項 (Dictionnaire de la civilisation japonaise 1994: 242-251)においては、「借景: 第二の構図 (町、整備された空間)を隠す視覚的障害 (壁、垣…)が『直接に』第一の構図 (庭園)と第三の構図 (木の茂った山に具現化されたものとしての自然: 山は日本中あちこちに見られる)とを結びつけている。この『借用』は、大自然をして住居のすぐ近くに存在するものとしている (Ibid.: 242)。

¹⁰ 原文: «ces jardiniers japonais qui, pour obtenir une plus belle fleur, en sacrifient plusieurs autres.» (I, 283) ロベール・ド・モンテスキウがプルーストに想起した類似の文については、Albaret 参照 (Albaret 1973?: 309)。

¹¹ (Fraise 1997: 9)

¹² 原文: «fleuri sa table rien qu'avec des chrysanthèmes japonais» (Proust 1947, III: 470)

¹³ 原文: «Vous ne savez pas arranger les chrysanthèmes, disait-elle en s'en allant tandis que Mme Swann se levait pour

「ティーカップのなかの庭園…」

la reconduire. Ce sont des fleurs japonaises, il faut les disposer comme font les Japonais.? (*Ibid.*, I: 419)

¹⁴ 原文 : « portaient le dessin japonais de leurs ombres, brusquement mon cœur se mettait à battre... » (*Ibid.*, I: 132)

¹⁵ 原文 : « Comme les rives étaient à cet endroit très boisées, les grands ombres des arbres donnaient à l'eau un fond qui était habituellement d'un vert sombre mais que parfois, quand nous rentrions par certains soirs rassérénés d'après-midi orageux, j'ai vu d'un bleu clair et cru, tirant sur le violet, d'apparence cloisonnée et de goût japonais. » (*Ibid.*, I: 123)

¹⁶ 原文 : « Les silhouettes des arbres se reflétaient nettes et pures sur cette neige d'or bleuté, avec la délicatesse qu'elles ont dans certaines peintures japonaises ou dans certains fonds de Raphaël... » (*Ibid.*, III: 487)

¹⁷ 原文 : « le duc de Châtelleraut, qui a de magnifiques pommiers au bord de la mer, comme sur un paravent japonais » (*Ibid.*, II: 150)

¹⁸ 原文 : « l'horizon lointain de la mer fournissait aux pommiers comme un arrière-plan d'estampe japonaise » (*Ibid.*, II: 531)

¹⁹ 原文 : « ces grandes décorations des chambres d'aujourd'hui où, sur un fond d'argent, tous les pommiers de Normandie sont venus se profiler en style japonais... » (*Ibid.*, III: 461)

²⁰ 原文 : « les peintures appartenant à ses premières et deuxième manières... la manière mythologique et celle où il avait subi l'influence du Japon, tous deux admirablement représentées » (*Ibid.*, I: 576)

²¹ 原文 : « tout petit, tout rond, comme un parasol chinois » (*Ibid.*, I: 619)

²² 原文 : « Une fois c'était une exposition d'estampes japonaises : à côté de la mince découpe de soleil rouge et rond comme la lune, un nuage jaune paraissait... » (*Ibid.*, I: 556)

²³ 原文 : « comme une magnifique peinture, comme un précieux émail japonais » (*Ibid.*, II: 614)

²⁴ 原文 : « la photographie d'un chapiteau où je vis des dragons quasi chinois qui se dévoraient ? » (*Ibid.*, I: 581)

²⁵ 原文 : « un petit pan de mur jaune ... était si bien peint, qu'il était, si on le regardait seul, comme une précieuse œuvre d'art chinoise, d'une beauté qui se suffisait à elle-même » (*Ibid.*, III: 129)

²⁶ 原文 : « nous apparaissent aussi trompeuses que ces effets d'Elstir où la mer a l'air d'être dans le ciel. » (*Ibid.*, III: 256)

²⁷ 原文 : « réduit à regarder les caractères comme un dessin, sans savoir les lire » (*Ibid.*, II: 640) 他の一節が同様に、漢字に対する示唆を行っていると思われる一少なくともブルーストがそれらを解釈していた—彼が言うには「私は私自身の存在を通じて人々と逆の道を歩んできた、それは文字が連続するシンボルとして捉えられてはじめて、表音文字として機能するようなもの…」²⁸「J'avais suivi dans mon existence une marche inverse de celle des peuples, qui ne se servent de l'écriture phonétique qu'après avoir considéré les caractères comme une suite de symboles ...» (*Ibid.*, III: 63)

²⁸ 原文 : « De toute évidence, quand j'avais connu Albertine, le mot de « mousmé » lui était inconnu. Il est vraisemblable que, si les choses eussent suivi leur cours normal, elle ne l'eût jamais appris, et je n'y aurais vu pour ma part aucun inconvénient car nul n'est plus horripilant. A l'entendre on se sent le même mal de dents que si on a mis un trop gros morceau de glace dans sa bouche. Mais chez Albertine, jolie comme elle était, même « mousmé » ne pouvait m'être déplaisant. » (*Ibid.*, II: 247)

²⁹ 原文 : « Mousmé est un mot qui signifie jeune fille ou très jeune femme. C'est un des plus jolis de la langue nipponne ; il semble qu'il y ait, dans ce mot, de la moue (de la petite moue gentille et drôle comme elles en font) et surtout de la frimousse (de la frimousse chiffonnée comme est la leur). Je l'emploierai souvent, n'en connaissant aucun en français qui le vaille » Loti (Loti 1888: 82)、Fraise (Fraise 1997: 18) を参照せよ。「Mousmé (ムスメ)」の語は、原語である日本語の「娘」との関連がほとんど忘れられている上に、フランス語辞書 Petit Robert, Dictionnaire de la langue française の中にも説明が見られる点は興味深い。Bernadette Lemoine は、Loti と日本との関係に関する批判的視点を提起している (Lemoine 1997: 203-211)。

³⁰ 原文 : « qu'il aimait tant » (Albaret 1973: 76)

³¹ 原文 : « un très joli petit meuble chinois » (*Ibid.*: 390)

³² 原文 : « un très beau paravent à décor chinois et à cinq feuilles, derrière la tête du lit » (*Ibid.* : 77)

³³ Fraise によれば、ブルーストの部屋は日本の屏風で飾られていた、「ブルトウイユ城において時に彼が使用しており、カルナヴァレ博物館において再構成されている部屋 (現在、「Chambre Marcel Proust (マルセル・ブルーストの部屋) 」と呼ぶ) は、日本の装飾品で飾られていた (寝床、屏風、置物)」 (Fraise 1997: 16)

³⁴ « habitait un petit hôtel très étrange avec des chinoiseries » (Proust 1947, I: 296)

³⁵ « des potiches chinoises » (*Ibid.* : 160)

- ³⁶ « coussins de soie japonaise » (*Ibid.*)
- ³⁷ « cache-pot de Chine » (*Ibid.*)
- ³⁸ « une grande lanterne japonaise suspendue à une cordelette de soie (mais qui, pour ne pas priver les visiteurs des derniers confort de la civilisation occidentale, s'éclairait au gaz) » (*Ibid.*: 159.) ここでは、谷崎潤一郎が「陰影礼賛」の中で、科学文明の恩恵と日本的様式とを調和的に統合するために注がれている努力に関して描写を行っていることが頭に浮かぶ (Tanizaki 1995: 15-18)
- ³⁹ 原文: « kimono » (Proust 1947, III, 52-53)
- ⁴⁰ 原文: « ennuagée dans la brume d'une robe en crêpe de Chine » (*Ibid.*: 26)
- ⁴¹ 原文: « sa robe de chambre était chinoise » (*Ibid.*: 26)
- ⁴² 原文: « portait quelqu'un des jolis peignoirs en crêpe de Chine, ou des robes japonaises » (*Ibid.*: 45. 同様に *Ibid.*, II: 714 も参照せよ)
- ⁴³ 原文: « dîners chinois » (*Ibid.*, I: 382)
- ⁴⁴ 原文: « Son mince et étroit visage était entouré de cheveux noirs et frisés, irréguliers comme s'ils avaient été indiqués par des hachures dans un lavis à l'encre de Chine. » (*Ibid.*: 402)
- ⁴⁵ 原文: « Ce n'est pas de la salade japonaise ? dit-elle à mi-voix en se tournant vers Odette. » (*Ibid.*: 184) 1887年に作られたアレクサンドル・デュマ・フィスの戯曲 *Francillon* に対する示唆で、そこではレシビが第二幕第一場において示されている。Zu Gast bei Marcel Proust(p.138) 参照。このジャガイモをベースに作られた「日本のサラダ」は、シャンパンとシャトー・イケムのワインと一緒に用意されていることを指摘しておこう。
- ⁴⁶ 原文: « cette salade japonaise, mais en faisant mettre tout ce que Alexandre Dumas fils dit dans la pièce. Elle avait invité quelques amies à venir en manger. Malheureusement je n'étais pas des élues. Mais elle nous l'a raconté tantôt, à son jour ; il paraît que c'était détestable, elle nous a fait rire aux larmes. » (*Ibid.*:184)
- ⁴⁷ 原文: « où la simple salade de pommes de terre est faite ainsi de pommes de terre ayant la fermeté de boutons d'ivoire japonaise, la patiné de ces petits cuillers d'ivoire avec lesquelles les Chinoises servent l'eau sur le poisson qu'elles viennent de pêcher. » (*Ibid.*, III: 471)
- ⁴⁸ 原文: « toutes ces chinoiseries de forme, toutes ces subtilités de mandarin déliquescent me semblent bien vaines. » (*Ibid.*, I: 332)
- ⁴⁹ 原文: « l'Extrême-Orient reculait de plus en plus devant l'invasion du XVIIIe siècle » (*Ibid.*: 428)
- ⁵⁰ 原文: « semés de bouquets Louis XV, et non plus comme autrefois de dragons chinois. » (*Ibid.*: 429)
- ⁵¹ 原文: « maintenant c'était plus rarement dans des robes de chambre japonaises qu'Odette recevait ses intimes » (*Ibid.*: 429 同様に *Ibid.*: 414 も参照せよ)
- ⁵² 原文: « à remplacer dans ce fouillis nombre des objets chinois qu'elle trouvait maintenant un peu « toc », bien « à côté », par une foule de petits meubles tendus de vieilles soie Louis XIV » (*Ibid.*: 376)
- ⁵³ 原文: « en contraste avec les rares ornements floraux des salons Louis XVI d'aujourd'hui – une rose ou un iris du Japon dans un vase de cristal à long col qui ne pourrait pas contenir une fleur de plus – » (*Ibid.*: 413)
- ⁵⁴ 原文: « collection de vieux Chine » (*Ibid.*: 622)
- ⁵⁵ 原文: « grande potiche de vieux Chine qui me venait de ma tante Lvonie » (*Ibid.*: 433)
- ⁵⁶ 原文: « le magasin d'un marchand de chinoiseries que connaissait mon père. » (*Ibid.*)
- ⁵⁷ 原文: « de ce Dieu chinois qui compte aujourd'hui en France plus de sectateurs que Brahma, que le Christ lui-même, le très puissant Jemenfou » (*Ibid.*, II: 647)
- ⁵⁸ 原文: « dans la province de Canton, en Chine, on ne peut pas vous offrir un plus fin régal que des œufs d'ortolan complètement pourris. » (*Ibid.*: 344)
- ⁵⁹ 原文: « Mme la duchesse vous donnera un dictionnaire chinois... ». « Tu nous menaçais de passer définitivement ta vie en Chine ». « Tu étais peut-être amoureux d'une Chinoise » (*Ibid.*: 488)
- ⁶⁰ 原文: « Vous n'allez pas me laisser seule en tête-à-tête avec ces Chinois-là. » (*Ibid.*: 601)
- ⁶¹ 原文: « séances...qui réunissent des amateurs de vieilles tabatières, d'estampes japonaises, de fleurs rares » (*Ibid.*: 421)
- ⁶² 原文: « l'art du porcelainier », « des assiettes de Yung-Tsching fermeté de boutons d'ivoire japonais » ou « cette barbue dans un merveilleux plat Tching-Hon. » (*Ibid.*, III: 471.) それぞれ雍正帝 (在位 1723-1735) と成化時代 (1465-1487) のものである。特に成化時代は「陶器に関する驚くべき成功」で有名である。Gernet 参照 (Gernet 1990: 372)。

「ティーカップのなかの庭園…」

⁶³ 原文 : « quand éclata la guerre russo-japonaise » « les pauvres Russes » « jugeait coupable la France, restée neutre à l'égard du Japon. » (Proust 1947, II: 229)

⁶⁴ 原文 : « dernières nouvelles de la guerre russo-japonaise » (*Ibid.*, III: 387)

⁶⁵ 原文 : « on échange ses opinions sur la Chine » (*Ibid.*, II: 149)

⁶⁶ 原文 : « on est inquiet par la Chine » (*Ibid.*, III: 387)

⁶⁷ 原文 : « péril jaune » (*Ibid.*, II: 553)

⁶⁸ 原文 : « momentanément réhabilitée » III, 605. 日本人はドイツ植民地に対して戦っていたのに対して、中国人は同盟国側に対して労働力を提供していた。

⁶⁹ 原文 : « un critique militaire très fort, qui avait savamment déduit, avec preuves à l'appui pour quelles raisons infaillibles dans la guerre russo-japonaise, les Japonais seraient battus et les Russes vainqueurs » (*Ibid.*, I: 532)

⁷⁰ 原文 : « N'ai-je pas lu de lui une savante étude où il démontrait pour quelles raisons irréfutables la guerre russo-japonaise devait se terminer par la victoire des Russes et la défaite des Japonais ? » (*Ibid.*, II: 153)

⁷¹ 原文 : « échangea un de ses régiments contre une collection de potiches chinoises » (*Ibid.*, III: 523)

⁷² 原文 : « défaite quand les Russes par un mouvement stratégique se replient devant les Japonais sur des positions plus fortes et préparées à l'avance » (*Ibid.*, II: 325)

⁷³ 原文 : « La victoire appartient, comme disent les Japonais, à celui qui sait souffrir un quart d'heure de plus que l'autre » (*Ibid.*, III: 515)

⁷⁴ 原文 : « (On n'avait pas encore importé d'Orient : « La Victoire est à celui des deux adversaires qui sait souffrir un quart d'heure de plus que l'autre, comme disent les Japonais. ») » (*Ibid.*, I: 324.) 私は、ブルーストが引用するこの文に相当する日本の諺を見つけていない。ブルーストとジャポニズムに関する博士論文 (Paris, 1997) を書いた鈴木順二氏は私の質問に対し、おそらくこの諺は創作であると答えた。

⁷⁵ 原文 : « ce charme du dépaysagement ... dans une pièce russe ou japonaise, jouée par des artistes de là-bas » (*Ibid.*, II: 705)

⁷⁶ 原文 : « donne à ces voyageurs le même plaisir étrange et délicieux que nos boulevards à un Asiatique » (*Ibid.*: 273)

⁷⁷ 原文 : « la réduction progressive, l'extinction finale du désir » (*Ibid.*, III: 302)

⁷⁸ 原文 : « une religion parle d'immortalité, mais entend par-là quelque chose qui n'exclut pas le néant » (*Ibid.*, II: 731)

⁷⁹ 原文 : « Ce que j'appellerais l'atmosphère proustienne, la mort successive des personnes que nous portons en nous, cette décomposition-recomposition de la personnalité au fil du travail du temps est, je crois, assez facile à comprendre pour un japonais qui par son héritage bouddhique a tendance à se laisser faire par le temps, à s'y plier et ainsi jusqu'à un certain point à le dépasser. », *Le Monde* 紙 (1996年12月20日) の Philippe Pons の記事より。日本の多くの文献学者によるブルーストの書簡集総合目録の作成に関しては、朝日新聞 (1999年1月27日) の Kazuyoshi Yoshikawa による記事「ブルースト書簡集の総合索引。日本の仏文学者共同作業の完成」参照。

⁸⁰ *Larousse mensuel* (1923年9月) における Jean Hytier の記事 «Proust» (p249-250) を参照せよ。そこでは、「私的随筆の連続として」捉えることのできるブルーストの作品の「哲学的、美学的」様相が指摘されている。

⁸¹ 「哲学事典」平凡社、1223頁。

引用文献

Proust, M. 1947, *A la recherche du temps perdu*, édition illustrée de soixante dix-sept aquarelles par Van Dongen, NRF, Gallimard.

Proust, M. 1965, *Choix de Lettres*, Présentées et datées par Philip Kolb, Préface de Jacques de Lacretelle de l'Académie française, Plon.

Proust, M. 1954, *Contre Saint-Beuve – Nouveaux Mélanges*, Préface de Bernard de Fallons, NRF, Gallimard.

Proust, M. 1991, *Correspondance*. (21 vol.) Ed. par Philip Kolb, Plon.

Proust, M. 1965, *Proust. Collection Génies et Réalités*, Hachette.

Albaret, C. 1973, *Monsieur Proust. Souvenirs recueillis par Georges Belmont*, Editions Robert Lafont.

Berque, A. (Ed.) 1994, *Dictionnaire de la civilisation japonaise*, Editions Hazan.

- Fraisse, L. 1997, *Proust et le Japonisme*, Presses Universitaires de Strasbourg.
- Gernet, J. 1990, *Le Monde Chinois*, Troisième édition revue et augmentée, Armand Colin.
- Henning, K. 1980, *Japanische Gartenkunst. Form – Geschichte – Geisteswelt*, DuMont Buchverlag.
- Hytier, J. 1923, Proust, *Larousse mensuel*, Septembre 1923, pp. 249-250.
- Lemoine, B. 1997, Le japon à la manière de Pierre Loti, dans *Le vase de béryl, Etudes sur le Japon et la Chine en hommage à Bernard Frank*, Editions Philippe Picquier, pp. 203-211.
- Loti, P. 1888, *Madame Chrysanthème*. Dessins et aquarelles de Rossi et Myrbach, Gravure de Guillaume Frères, Collection E. Guillaume, Calmann Lévy Editeur.
- Naudin, J-B., Borrel, An., Senderens, Al. (Ed.) 1991, *Proust. La cuisine retrouvée*, Editions du chêne (version allemande: *Zu Gast bei Marcel Proust*, München: Wilhelm Heyne Verlag, 1992).
- Nathan, J. 1953, *Citations, références et allusions de Proust dans A la recherche du temps perdu*, Librairie Nizet.
- Mauriac, Cl. 1984, *Proust*, Rowohlt.
- Pons, Ph. 1996, Le Japon à la recherche de Proust, *Le Monde*, Vendredi 20 décembre 1996.
- Tanizaki, J. 1995, *Eloge de l'ombre*, Traduit du japonais par René Sieffert, Publications orientales de France.
- 下中弘 (編) 1989, 『哲学事典』、平凡社。
- 吉川一義 1999, 「プルースト書簡集の総合索引 日本の仏文学者共同作業で完成」『朝日新聞』1月27日付。